

十六



御幸

天子ノ御幸候ハ幸ニ天子ノ御幸ノ處ニ少幸アリト云々

卷名ハ方々トテ早ニモテ早野ノ山ノ邊ニ至リ又此ノ邊ニ

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

あり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり又此ノ邊ニあり

記述

市

或用

小

今

玉

飼

地

布

の

文

と

衣

也

布

の

文

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

と

布

の

文

と

北まゝ
（？）

例にありては、（？）の例に、（？）

之を、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

と、（？）の例に、（？）

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

いふは...
いふは...
いふは...

一内府にありて

中納言のふりて

わがやうに

文とせしめ

おすせしめ

つて

ふまのふりて

のふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

ふりて

何種歌曰五言不能乃止中世新撰奉之市郊里人邪
美濃三三 解印 志縣乃去瑞玄来

なうーいそんーち候てまのバに死なふだ

い中ゆいーいふちの事いハが事よりいふたをい

を候ふーきーのーまゑと候ふわうー也

見ふそと候ふ内府のち毎日歌集と河小と候ふ

いそまゑとちせんーちうろ事と内府と候ふん

也候ふのち候ふ

ふむけのちけさるー開白くもふりてまの事い

ひふさこーとまゑ又まゑのちうーたうーこさう也

の候ふち候ふんーちまの候

ゆねれうけふーちまの候を井かうの事と候ふ用が也

ふふまゑさるーちまの候と又まゑ乃思ふ何所

いふふあーてふふんー也

ふらふひ候ふー候ふのち候也

いふひち候ふーてーわとまゑられー思ふ事いふ也

又いふひち候ふ也

ふふふふんー^{せうく}あふ^かと^わまゑ^の事と候ふの候ふ

まゑふいふあ内府のちまゑ客通の事と候ふ

いふふふて河の内府の事いふあ所と候ふのち

一候ふ事と候ふ

ふふひの事いふまゑと候ふ河の候ふと候ふ

めふふー洗濯のち上の候ふと候ふ

ふふふふふふの候ふ

かうらふふふふふふふふふふふふふふふふ

せとまゑと候ふと候ふの候ふふふふふふふ

毎々すゝたはとてしるゝもき種姓の人の事く
そんゝとてを別しあゝと水小ゝとて
わすしゝとてとてとていゝとてとてとてとて
并ゝの事ゝとて

わすしゝとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

[illegible]

三

[illegible]

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

はるかにいふに府のむすめは、
はるかにいふに府のむすめは、

今も山前土丸とゆふ倍あり

一、内六臣之說

月夜也西風の秋をうけ

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

あまの

いふもろゝしきものぞをかんふふにぞろ

孝
子
之
行

徳成り徳なりと云ふ事なり

乃礼とわさるる人なやまといふやうに海の内

こゝ日一 20首の蒙着の日也

いさくもろく下 河内 佐々木 久々子

好印之筆之入也

かゝるしるしありし事とて、
はとめておきし事とて、
内大臣の思所なり

あつた事とて、
おふと推察し

それとて、
流す事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

あつた事とて、
あつた事とて、

[illegible][illegible]

いふべしききりきんじ花又わらう初しを文のはよと
海よのわめはうい

かなれわやいさむくもいふまにうも愛人うさの
海とさきう批判にいけくもいさあう
掃ふくさうさうりあうらうくあうく留国うさ

中文らりー柱ぬのき

いふあけのく髪あけの具足さきや

かゝるたれ也ーきん也みあ唐方方
えいーうさのくもー二事あいのま原也

わは少いの眼をさても用事立例一部青銅ハ服者

あう様と著する書句論也さあいハ此也

わらうらうやーとこ縁らう今うさし第ふとさー

しーのふめたりあけくもさあさ

めいさうらうぬーく、新う中言ひうは様、

いふ新、川勘ー一葉

さきうあうーは系のえんさきさきうさ武院

さうさきうにほく上と知てほくあきい

あこれあうさきさうさうあこれの文いあふあう

あうらうさう 休あれ地改

いふいさうゆーさー衣ささほさうさ

あうらうーさあさうさ 双葉何

あうらうーはあうーさあほいさうさうさ

うさーさ

あうらうーはあうの事さあさうさうさ

事
主の心を
いふる心
なりぬる

いづつうふひー肉を食ひてはみけのうゑ
 海あひうゑ也あひうゑと事

あゝのよし
内侍の
あゝのよし
あゝのよし

近江の物

夢の夢を

しひのふくろにきこるるしひのふくろに
しひのふくろにきこるるしひのふくろに

かゝる
あつた
もの

暖平流くー空はのろーさきとらねん内菊のち

之
 予
 我
 物
 子
 義
 長
 一
 二

ふまのうらゝの事いふやうな事

けい、
 のや
 中
 へ
 ほう
 い
 び
 じ
 事
 と
 を
 せ
 ゐ
 い

いせて可いものけしき酒月急を急花
 中ノリ終ふ言をうそいふん也

是よりそゝ物よりひきかんせんえきおの生ぐ災と也
 此よりめしうゝゝゝ内土屋の山氣のよきゝ河あふの

萬年天子

其へらかてー。此土屋の全ひあゝあゝと

いづてかゝるもの

七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

元和四年辛酉月廿八日 梅尺施す

たのめ

藤原 兼

卷の五并初より卷の六まで此の巻にあり
おろしあはれいふる者ありとあるは
此の巻にあり

田子のり一室第のり
事ありおろしあはれいふる者あり

そこのり
おろしあはれいふる者あり

おろしあはれいふる者あり
おろしあはれいふる者あり

おろしあはれいふる者あり
おろしあはれいふる者あり

いふやうに

海を渡るに 舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

舟をあたふたすなりと云ふ

天の宮へておのり

奈子とて思ふ一海の心詞

くニてすも云はるの心

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

よりなるこもす一海の心詞

[illegible][illegible]

[illegible]

不^レと^レも^レ口^二一^一を^レ知^ルる^一に^レ志^スす^レ所^ニ
と^レゆ^ク者^ハ此^ノ名^ヲと^シ

かくもよくしほはめ初まうの
 かくもよくしほはめ初まうの
 かくもよくしほはめ初まうの

[illegible]

五三六
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

東宮ノ一ノ終ノ重ノの日子ノすく女
寅ノ上ノの海集

香波のうと顔黒の娘

まゝうらぶうらぶに
いふていふていふて

吾の妻は婦人之梨の如く天の星の如く女と

年としのとし三つさんふりふりととなりなり
 大空おおぞらははあめあめ也や

女字と云ふは、
姫字と云ふは、
一に於て

と一ふり
と花の月
とあふ
と

[illegible]

Handwritten text in cursive script, likely a signature or a list of names, written vertically on aged paper.

卷之八

高のふりやうとて、
 かきつけ、一層の意はほむ。次
 りくを地くらを記し、あれとて
 我といふところへ、向日ときを
 ふるふれとて、いふところへ、
 そゝるに、さうして、いつかの

[illegible]



